

令和 4 年 4 月 20 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202180106
氏 名 山口晃人

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ニュージャージー州ニューブルンズウィック（国名 アメリカ合衆国）
2. 研究課題名（和文）：ロトクラシー・選挙デモクラシー・エピストクラシー：望ましい意思決定手続きの探究
3. 派遣期間：令和 3 年 12 月 19 日 ～ 令和 4 年 3 月 20 日（91 日間）
4. 派遣先機関名・部局名：ラトガース大学・哲学科
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

在外研究では、くじ引きで立法府の代表者を選出する「ロトクラシー（lottocracy）」についての政治哲学的な検討を行った。受入研究者である Alex Guerrero 教授は、英語圏におけるロトクラシー研究の第一人者であり、その指導を受けながら、研究を進めた。

具体的には、主に以下の 3 つのことを行った。第一に、共同研究者と実施したロトクラシーに関するオンラインサーベイ実験について、共著論文の草稿を書いた。第二に、ロトクラシーをコンドルセの陪審定理を用いて正当化することを目指す単著論文の草稿を書いた。第三に、博士論文の構想をまとめた。これらについては、Guerrero 教授からそれぞれコメントをいただいた。

在外研究は、オミクロン株の流行により、当初の計画通りに実施することができなかった。1 月中は大学自体が閉鎖され、2 月中も面談は引き続きオンラインでということになった。そのため、Guerrero 教授と直接対面でお会いできたのは、3 月に入ってから 2 回だけであった。そのような状況であったため、Guerrero 教授以外の研究者とは、現地の院生の方々と少しメールをやり取りした程度で、ほとんど交流がなかった。ラトガース大学の哲学科は、高名な研究者が多数在籍する、英語圏でも有数の哲学研究機関として知られている。コロナのために、そうした機関で研究する機会を十分に生かすことができなかったのは非常に心残りである。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の在外研究から得られた成果については、下記のような仕方で発表する。

第一に、ロトクラシーに関するサーベイ実験共著論文については、Guerrero 教授から、報告者が担当する理論とディスカッションのパートについて詳細なコメントをいただいたので、それを参考にしつつ修正を進め、近日中に海外査読誌に投稿したいと考えている。

第二に、ロトクラシーをコンドルセの陪審定理を用いて正当化する単著論文については、まだアイディア段階なので、すぐにどこかの雑誌に投稿することは考えていない。Guerrero 教授からいただいたコメントを参考にしつつ、先行研究の洗い出しや分析の追加を行い、数年後に海外査読誌に投稿できればと考えている。同論文については、もう少し進展してから、(可能であれば、再度ラトガース大学で在外研究をして、) 改めて Guerrero 教授のご意見を伺いたいと考えている。

第三に、博士論文については、本年度中に東京大学に提出する予定である。博士論文の各章についても、Guerrero 教授に改めてコメントをもらいたいと考えているので、zoom などで相談できないか、改めて打診する予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムに採用されたことで得られたことは下記の 3 つである。

第一に、Guerrero 教授に、論文や博論構想について、詳細なコメントをいただくことができた。Guerrero 教授からのコメントは示唆に富むものばかりで、論文や博論の方向性の修正に役立った。また、Guerrero 教授との議論を通じて、長期的に取り組みたい新たな課題を見つけることもできた。このような機会は、本プログラムに採用され、ラトガース大学で在外研究をすることができなければ得られなかったものである。

第二に、今回の在外研究中に、Guerrero 教授のご厚意で、オックスフォード大学出版会から出版予定の単著草稿の一部を読ませていただくことができた。同草稿に関連して、それを主題にしたチューレーン大学で開かれた研究会(オンライン)にも参加させていただいた。研究会での議論を通じ、第一線で活躍する海外の研究者たちがどのような問題に関心を持っているのかを知ることができたことも、非常に有益であった。

第三に、英語圏におけるロトクラシー研究の第一人者である Guerrero 教授とのつながりができたこと自体、非常に大きな成果であると言える。Guerrero 教授からは、帰国後もオンラインで気軽に研究の相談をしてほしいと言われている。このつながりを生かして、論文の草稿について、適宜 Guerrero 教授に相談させていただき、今後の研究成果に結びつけていきたい。報告者はまた、数年後に改めて、Guerrero 教授の下で在外研究をしたいと考えている。その時には、コロナによる制約がない中で、より良い在外研究を行いたい。今回の在外研究では、コロナの影響で当初の計画通りに進まなかったことが多かった。特に、Guerrero 教授以外の、現地の研究者や院生の方とほとんど交流できなかったのは、非常に残念であった。次の在外研究では、現地の研究者と積極的に交流し、研究を更に発展させたい。